

#### 海員組合の元執行部・金森洋輔氏が講演④

自身の歩みを振り返りながら、日本の遠洋漁業と船員の歴史を語る  
戦後の船員が日本の食を支えてきたことを伝えたい

7 月 12 日、広島県尾道市向島町の尾道市民センターむかいしま「こころ」で、向島公民館サークル「今を楽しもう会」の主催する講演会が開催され、元組合執行部の金森洋輔さんが『獲物を追って（遠洋トロール）激闘 海に生きた男の記録』をテーマに講演し、約 100 人が耳を傾けた。

#### 200 海里時代がもたらした大きな転換

講演会の後半では、国連海洋法条約や 200 海里時代の到来についても分かりやすく解説された。

1970 年代、日本の遠洋漁業は大きな転機を迎えた。

沿岸国が自国の海岸線から 200 海里（約 370 km）の範囲で水産資源や鉱物資源を独占できる「排他的経済水域（EEZ）」を設定したことで、それまで自由に操業できた漁場へ入ることが難しくなり、日本の遠洋トロール漁業やサケ・マス漁業は急速に縮小し、国際ルールの変更による影響は大きく、日本の遠洋漁業は次第に姿を変えていった。

金森洋輔さん自身も、この制度の影響を直接受けた一人であり「200 海里は日本の遠洋漁業を大きく変えた」と振り返った。

また、船員としての経験を活かし、船の位置を星や太陽から求める「天測」、赤と緑の航海灯による船の見分け方、船内の職制なども紹介され、一般参加者にも分かりやすく船員の仕事の奥深さを説明した。専門的な内容でありながらも、豊富な体験談やユーモアを交えた語り口に、会場からは笑いが起こる場面も多く見られた。

最後に金森洋輔さんは、全日本海員組合は戦後間もない頃から乗組員の労働条件や労働時間の適正化、海難防止や船内安全の確保などの課題に取り組んできたことを紹介し「現在の船員職業は、危険と隣り合わせではなく安全な職業なので、家族や親戚に船員になるよう薦めてほしい。今の豊かな日本があるのは、戦後の苦しい時代に世界中の海へ出て働いた船員たちのおかげです」と呼びかけ、戦没船員の碑に刻まれた『安らかにねむれ わが友よ 波静かなれ とこしえに』の言葉で締めくくり講演会は終了した。

「海員だより」